

小学校英語 Just Now

1. はじめに

「ねえねえ、先生、どうやったら英語ができるようになるの？ 英語ができるようになりたい！」

ここ最近の揺れる私学の小学校の外国語教育、さらには日本の英語教育を考えると、子どもたちのそんな叫び声が聞こえてならない。果たして、小学校で「何を」「どのように」経験させていけば、子どもたちの願いを叶えてあげられるのだろうか。本校の英語教育を例に、小学校英語の在り方に迫りたい。

2. 何を？

(1) 教育課程における英語科の役割

教科教育課程の中で英語科が担う教育には、①「全教科で共通して育てたいもの」と、②「英語科だからこそ育てなければならないもの」がある。本校英語科の場合、それらは、①「人・もの・事の見方やそれらとの関わり方」、②「英語の運用力」となる。

(2) 英語教育における小学校英語の役割

次に考えるべきは、英語教育全体の中で、小学校だからこそ特に育てておきたいものが「何か」である。本校では、子どもたちの「できるようになりたい」気持ちに応えるために、次の3つを挙げている。

①情報を処理する力

英語の世界でもリラックスでき、伝えられた内容を推測したり、伝えたいことを表現したりする力を持たせたい。

②「英語らしさ」の感覚と視点

自分がどんな英語の使い手を目指しているかイメージでき、イントネーションや発音、語順や代名詞の視点などにおいて、相手により伝わりやすい英語を使おうとする力を育てたい。

今、私立小学校の外国語教育に何が起きているのか(2) —「英語ができるようになりたい！」という子どもたちの思いにどう応えるか

入江 潤 Irie Jun
みょうじょう
(明星学園小学校)

③自律的に学ぶ力

自分で生きていけるようになるためにも、次のような学び手に育てていきたい。

- ・自分が何を学んでいるかが分かっている
- ・自分の学習目的を理解している
- ・自分自身を評価するポイントを持ち、自分の力を客観的に判断することができる
- ・自分に合った学び方を選び、実行できる
- ・互いに協力して学ぶことができる

3. どのように？

(1) カリキュラム

カリキュラムは次の2つのポイントで考えている。

①子どもたちが表現したいことは何か

英語は「ことば」、そして「ことば」は「表現のための道具」。表現欲があつてこそ、ことばとしての英語も獲得される。本校のカリキュラムは、「自分のこと、友だち、家族、好きなスポーツ選手、ミュージシャン、週末の予定、歴史、物語について英語でやりとりできるようになりたい」という子どもたちの気持ちからカリキュラムを組み立てている。

②どのような順序で経験させるか

「好きなスポーツ選手について英語で言いたい」と言ってもすぐにできるようになるわけではない。よって、カリキュラムでは、そのことが表現できるようになるためにどの段階でどのようなことを経験させていけばいいかを考え、汎用性の高さや表現のしやすさなども考慮して英語表現を系統的に組んでいる。例えば、1、2年生の段階では子どもたちの興味のあるトピック(色、数、食べ物、動物など)を通して英語でのやり取りを進め、英

語の情報処理の経験を積み、語彙も増やす。しっかりと学びたい3年生では、少し長めの英語の歌やラ임을扱ったり、2年生までの経験の上に英語を文で表現することを経験させたりする。認知面での成長が更に高まる4年生からは、それまでの音声での経験を文字でも確認しながら、代名詞や肯定・否定・疑問文、形容詞や動詞の変化を整理し、表現の自由度を高めていく。よって、話題も自分のことから友達や好きなスポーツ選手、更には世界や歴史のことなどに広がっていくようにデザインされている。

(2) 授業時数

本校では、全学年で週2時間の英語の授業を行っている。授業をするからには、学校行事があっても最低週1回の授業は子どもたちのために保障されるべきだと考えてのことである。

(3) 授業形態

3年生までは全ての授業でTT(日本人教師と英語のnative speaker)を行い、4年生以上では、週2回のうち、1回はTT、もう1回は日本人のみでの授業を行っている。

(4) 授業

授業にとって重要なねらいの設定や活動の選択と進め方については、次の2つを意識している。

①社会に出た時に使える力をつけさせているか

いくら楽しい活動であっても英語が使えるようになることに繋がっていないければ意味がない。「聞く・話す・読む・書く必然性があるか」「コミュニケーションになっているか」を、自問自答しながら進めている。

②間違った英語を教えていないか

子どもたちは「先生が使う英語は正しい」と疑うことなく取り込む。I like dog. How many?のような非文を提示しないように心掛けている。

(5) 教材

3年生までは、絵を見ながらやりとりが深まる教材(『English in Wonderland』『WORD BOOK』ぼーぐなん、『えいごリアン』NHK等)を使用し、4

年生以上では、音声での体験が文字でも確認できる、文字の豊富なテキスト(『English in Action1-4』ぼーぐなん)と、リスニングやライティングを通して子どもたち自身が自己評価できるワークブック(『WORD BOOK』ぼーぐなん)を使用している。

(6) 評価

「評価」は大きく次の4つの視点で捉えている。

①授業中の教師による評価

授業中は評価の繰り返しである。評価は、必要に応じて、recastやadviceという形で子どもたちにフィードバックされる。必要があれば時には、児童に授業後に声をかけたりもする。

②授業中の子ども自身の自己評価

ワークブックでリスニングやライティングに取り組むことなどは、子どもたちにとって、自分の理解度を測る有効な機会になっている。

※日本語でコメントを書かせることはしない。

③学期末のテスト

毎学期末に、それまで触れてきたものについてのリスニングテストなどを行っている。テストは直後に自己採点し、自分に足りない学びについても考えさせるようにしている。

④学期末の評価表

毎学期末に評価表を出す。一人ひとりにコメントも書くが、「年間目標」と「子どもたちの現状」「今学期に経験した活動」「来学期の内容」をまとめたものとなるため、どちらかといえば保護者の子ども理解・英語教育理解を目的としている。

4. おわりに

「日本人はなぜ英語ができるようになってこなかったのか」これは、小学校英語を考える際に私自身が常に問い所としている問いである。改めて確認するが、子どもたちは英語ができるようになりたいと思っている。そして、私たち大人にはその思いに応えなければならない。教育現場は、政治や経済に巻き込まれず、目の前の子どもたちの姿から教育が目指すべき在り方を学び続けたいものである。